

論 文

## 『陽成院親王二人歌合』の「ねざめのこひ」と「あかつきのわかれ」の時間

小林 賢 章

同志社女子大学  
表象文化学部・日本語日本文学科  
特別任用教授Time of "Nezame no Koi" and "Akatsuki no Wakare"  
of "Yozeiin shinno Futari Utaawase"

Takaaki Kobayashi

Department of Japanese Language and Literature,  
Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts,  
Special Appointment Professor

—

『陽成院親王二人歌合』は陽成天皇の二人の親王元良親王と元平親王により制作された歌合である。前四十首の歌が、「ねざめのこひ」と「あかつきのわかれ」の二つの題のもとにそれぞれ二十首ずつ番わされて、成立している歌合である。

この歌合は大きく二つの系統の写本群があることが知られている。尊敬閣文庫蔵十卷本巻八と陽明文庫蔵二十卷本巻一〇、『陽成院一品宮歌合』の二系統である。これらのうち、前者系統がまとまりのある写本と言われているので、前者本をこの研究の底本とする。それも、『新編国歌大観第五巻』所収本文によって、研究を進める。ただ、前者写本には一首欠落していることが知られ、それは、後者系統によって補えることが知られている。

その欠落は、「ねざめのこひ」中の18番歌と19番歌の間にある歌で、『新編国歌大観第五巻』の解説によれば、後者の系統の写本から、その歌は左記の歌であるとされる。

(補)わすられずこひしとおもふにねざめつつゆめにもひとをみぬぞわびしき

本来なら、この歌の番号は19番とされるべきだが、すでに、『新編国歌大観第五巻』の『陽成院親王二人歌合』には通番が付けられており、「わすられず…」の歌の番号は欠番となっている。それに本稿では、この歌を特段に取り上げることもないので、この歌は欠番のままにしておく。

さて本稿は『陽成院親王二人歌合』の前半の「ねざめのこひ」の「ねざめ」は「夜半の寝覚め」を意味して使用されていることを和歌に使用されている単語から推定する。後半の「あかつきのわかれ」の暁は、和歌中のどの単語によって表現されているかを論じる。

結果として、例えば、後半の二十首の和歌の中に「あさほらけ」が二首に使用されている。「あさほらけ」は、「夜がほんのり明けて、物がほのかに見える状態。また、その頃。多く秋冬に使う。春は多くアケボノという。」(『岩波古語辞典補訂版』)のように考えるのが一般だったが、秋や冬の暁は真つ暗である。とすれば、朝ぼらけを上記のように考えるのは間違いであることは論を俟たないことになる。

「やはん」や「あかつき」がどのように表現されているかを検討し、その時間帯はどのような時間帯だったかを推定するのが、本稿の目的である。

## 二一

(補)歌を含めて、二十首が「ねざめのこひ」の題のもとに集められていることは、既に述べた。ここで、まず考えられることは、「ねざめのこひ」の時間が、歌の中に詠み込まれているだろうということである。

「ねざめ」に上接する語としては、「暁のねざめ」と「夜半のねざめ」のように二つの時間表現が付くこと阪倉篤義によって指摘されている<sup>①</sup>。それが、この『歌合』にも適応されるのかを検証するものである。

例えば、16番歌を見てみよう。

16 よはにおきてこひぞわびぬるはるのよはゆめにみえつるひとのなければ

この歌には、「よはにおきて」と時間を表現している。「よは」はヨナカ(夜中・夜半)やヤハン(夜半)と同一の意味で、午後十一時〜午前三時の間を言う表現だった。それより大切なことは、この歌は「よはのねざめ」を意識しており、決して、「暁のねざめ」を意識していないということである。その意識が他の十九首にも及ぶのだろうか。

残りの十九首の歌に表現される時間はどうかであろうか。16番歌で見たように各歌の時間表現と考えられるものを列記してみる。

4 「さよふけて」 9 「よなよなさむる」 15 「おもふよは」

17 「よるぞかなしき」 18 「さむるよなよな」 19 「なかぬよぞなき」

4番の歌には、「さよふけて」の表現がある。此の表現については既に述べたが、「さよ(あるいは「よ」)」が「更ける」と夜中の時間になっていることは既に述べた。

4番の歌も夜中に「めざめ」ていることになる。残りの歌には「よ(夜)」、「よる(夜)」、「よなよな(夜な夜な)」が含まれている。

当時の時間観で大切なことの一つに、午前三時までを夜と捉える考え方があったということである。

「夜もすがら」は一晩じゅうという意味だがその終了時間は午前三時だった。

「夜もすがら」とほぼ同じ意味に使用される「夜一夜」もその終了時間は午前三時だった。これらからわかるように、当時は夜(ヨ・ヨル)を午前三時までと捉えるとらえ方があったのであった<sup>②</sup>。

それとは別に、15「おもふよは」は「うちさめてこひしきひとをおもふよは」がたましひもゆきてつげなん」中の一部だが、「夜半」ではないことは断っておかなければならないだろう。

結果、4「さよふけて」を除いて、残り五つの用例は、夜の用例である。だが、その背後には午前三時までという意識があったのである。もう少し説明を加えよう。「よなよな」は毎晩の意味である。だが、その夜な夜なは午前三時まで毎晩の意味だったのである。

ここで問題となるのは、夜(ヨ・ヨル)は午前三時までを意味するにしても、よは(夜半)のように午後十一時は過ぎているのかという問題である。そのことは、2番の歌などが教えてくれる。

2 くやくやとまちてねざめにおきたればつきよりほかにいるひとはなし

ここに詠われた40首は恋の歌である。当時の恋には「宵暁の出で入り」という言葉がある。これは、宵に男は女のところへ出かけ、暁に男は女のところから帰るという意味である。そして、普通、宵は午後七時から午後十一時の間をいうのであった。「宵を過ぎて子の時ばかりに」(『竹取物語』)などがその終了時間を示していた。

2番の歌に戻ろう。「くやくやとまちて」とこの歌は詠んでいる。来るんじゃないか来るんじゃないかと女は男の到来を待っていた。その時刻は宵の時刻である。男の到来期待最終時刻は、宵の終了時刻午後十一時だった。「くやくやとまちて」眠りについた女性なら、十一時までは起きているはずである。「ねざめ」は一端寝てそれ以降に起きるという単語であるから、寝覚めの時刻は、夜半(午後十一時〜翌午前三時)の時刻になるはずである。

## 二二

「ねざめのこひ」の題下で、16よは(夜半) 1例。4「さよふけて」 1例。9・18よなよな2例。15・17・19「よ・よる(夜)」 3例の結果を得る。

ヨハ(夜半)は午後十一時から午前三時であることは述べた。「さよふけて」も結局夜半の時間になることを言うことを述べた。それに、「よ(夜)」「よる(夜)」

「よなよな」は午前三時前の時間を示すことも述べた。  
 「ねざめのこひ」の題下で詠まれた歌は、「夜半」を意識して詠まれていた。繰り返す。ここに詠われた「ねざめ」の歌の背後には、その寝覚めが「夜半の寝覚」であった女性の意識があったのである。

### 三

次に、後ろの半分、「あかつきのこひ」の題下の二十首を検討するのだがその前に「あかつき」その時間について検討しておく。この題には、「あかつき」が含まれる。中世に入ると別だが、平安時代以前の暁は寅の時と同意と考えてよい。そのことは、兼実の日記『玉葉』に「暁寅刻」という表現が十四例あることから納得される。時代が下るとまず後ろの切れ目がなくなる。さらに、前の午前三時の切れ目も薄れて、近現代では暁は夜明けごろを意味して使用されるようになる。ここではそうした語史を詳説するには及ぶまい。

午前三時～午前五時が暁であったのである。午前三時に暁の鐘が鳴る。寺院の六時の勤行の内の後夜の勤行を告げて寺院内に鳴らされたのである。私には当時、時刻の多くは寺院の鳴らす鐘によって一般の人に知らされていたと考えている。いやより正確に述べよう。寺院は寺院内で行われる勤行の時間を知るために、鐘を鳴らして時間を院内の僧侶に知らせていた。院内では、香時計（時香盤）や水時計により時刻を認識していたと考えられる。

こうした時間の問題を考える時、平安時代に寺院が時計を用意していた証拠をあげることは現在のところできてはいない。ただ、次の時代曹洞宗の開祖道元はその清規の中で「諸寺漏刻を直歳司に置き、人工両之を知す」（『日本国越前国永平寺知事清規』）と述べており、寺院において時計が重要な役割を担っていたことは、窺えるのである。

### 四一

「あかつきのこひ」題下二十首について時間表現を検討する。各歌でどのように時間が表現されているかを、第二節の夜半にならって提示する。

- 20 「あかつき」 21 「あかつき」 22 「あかつきがた」 23 「けさ」 24 「あさばらけ」  
 25 「あかつき」 26 「あかつき」 27 「あけぬ」 28 「あさつゆ」 29 「あさばらけ」 30

- 「あかつき」 31 「あけぬ」 32 「あけぬ」 33 「しののめ」 34 「けさ」 35 「あかつき」  
 36 「あかつき」 37 「おきてゆく」 38 「しののめ」 39 「あかつき」

以上が各歌で暁を顕していると考えられる箇所である。20番歌以下8首の歌には「あかつき」が含まれる。暁の題を「あかつき」の語で答えているのだから、何の問題もない。一、二用例を上げておくなら、

20 ひとしれぬわがみとおもへばあかつきのとりとともになきてかへらん  
 21 ひとしれずあかかわかるるあかつきにうちなきそふるをしのこゑかな

20番の歌も21番の歌も歌中に「あかつき」がある。歌題の「あかつきのこひ」の「あかつき」に暁で答えていることがわかる。歌題と対応していることでは、25 26 30 35 36 39番の六首の歌も同様であった。合わせて八首の歌は歌題に「あかつき」で答えていた。

22番歌は「あかつき」と類似の「あかつきがた」で答える。歌をしてみる。

22 ひとくるればひとめのもりにぬるとりのあかつきがたになきつつぞたつ

この歌に木船重昭は、「日が暮れると、森に来て寝る鳥のようなあなたは、人目を忍んでわたくしのところに来て寝て、暁ごろになりますと、別れを惜しんで泣きながら帰ってお行きになります。」のような口語訳を付けている。先、この「ひとくる」は、現在の我々の考える日暮れではない。「暮西剋」（『殿暦』 永久三年十一月二十日）、「昨夕酉刻」（『後愚昧記』 永徳二年五月二九日）などの用例を考えると、この暮れは午後五時になる意味である。

また、従来、アカツキは「夜が明ける前の暗い時間」と考えられていた。例えば「夜が明けようとして、まだ暗いうち。」（『岩波古語辞典補訂版』）。木船も語注に類似の注を述べている。アカツキは、それを午前三時から午前五時と考えるべきだと述べた。アカツキガタ（暁方）の解釈についてもそのことが影響する。アカツキガタは一般に「暁ごろ」と解釈すべきとされた。私はこれを「暁の始まりごろ」と解釈すべきだと述べた。この歌で考えて見ると、男性が女性のもとを去る時間、暁になると直ぐにの方が「人目」を気にする男の帰宅は、「暁の始まりごろ」の方がより適切なのであった。

「あかつきがた」も暁の一部ではあり、これも前の八首に入れられよう。

## 四一一

暁の次に多いのが、「あさ」のグループに入る、23番・34番の「けさ」、24番・29番の「あさほらけ」28番の「あさつゆ」の語群である。

前節で、木船が暁を夜の明け前の時間と考えていることを紹介したが、その解釈は『岩波古語辞典』の暁の注釈に似ていることは述べておかなければならない。その『岩波古語辞典』の解釈で次の点は問題点として指摘することができる。「ユフベ↓ヨヒ↓ヨナカ↓アカツキ↓アシタ」とある部分の、「アカツキ↓アシタ」の部分である。

次のような用例を見ておく。

(1) ほととぎす夢かうつつかあさ露のおきて別れし暁のこゑ

〔古今和歌集〕恋・三

(2) 宵ごとに帰しはすともいかでなほあかつき置きを君にせさせじ

苦しかりけり」とあれば、

あさ露のおくる思ひにくらぶればただに帰らむ宵はまされり

〔和泉式部日記〕

(3) 四月四日の暁、都を出でし朝あしたより〔海道記〕

右の三用例は、暁と朝(あした)の同時性を示す用例として上げた。右用例の内、(1)の用例は28番の「あさつゆ」と暁との同時性の用例になっている。

実はこうした用例を古典文学作品の中に探すのはそう難しいことではない。特に、詞書と和歌との関係にこうした用例は多く見つかる。ついでのので、ここでもう一つ用例を上げておく。

三月十日、師僧正房全 和答 経料紙

(4) 1740 とらの時めをさましつち千反の地藏宝号おこたりぞなき

1741 あさごとの暁おきのみなをこそ後世までのしるべともきけ

〔大納言為家家集〕

これは、「あさ」と「暁」の同時性とその時が「とらの時」であることがわかる用

例である。「ユフベ↓ヨヒ↓ヨナカ↓アカツキ↓アシタ」の時系列の内、「ヨナカ↓アカツキ↓アシタ」の箇所は「ヨナカ ↓アカツキ ↓アシタ」のようにでも表現されるべきである。

ここまでで、朝(アサ・アシタ)とアカツキの同時性を述べてきたが、23番・34番の「けさ」は今朝の中に朝を含んでいると考えられるから、これ以上述べる必要はあるまい。ただ、朝の始まりも暁方に含まれること、さらにつきに挙例する暁と朝ほらけの同時性を示す用例にもなるので、一例だけ上げておく。

(5) 五月ばかり、よふくるまで人々ものがたりして、そのひと

あか月にいでにければ、つとめて

12 あさほらけわかれにぬれしとこ夏のはばのつゆもけさはさながら

〔入道右大臣集〕(頼宗)

(5) 番の歌と詞書には「あか月」と「あさほらけ」と「けさ」が同時として詠まれている。「あか月」と「けさ」が同時であるばかりでなく、次に検討する「あさほらけ」も同時であることがわかる。

次に、「朝ほらけ」を検討する。これについても多くの用例があるから、その一部を呈示する。

(6) あかつきのしもしろしといふだいにて

287 しもかとおきておきてみつれば月かげにみてまがはせるあさほらけかな

〔実方集〕

(7) 夜ひとよたふときことときあかして暁方ぬみれば、よるちりける

花のやり水のなみによせられてすはうがひのさまなるに、さくら

がひとはこれをやなどいひて

42 夜もすがらちりける花を朝ほらけあかしの浦のかひかとぞみる

〔公任集〕

(8) アサホラケハ明旦トモ朝旦トモ書也当流ハ朝トクト云心也

〔古今和歌集問書〕

「あさほらけ」については少々解説が必要であろう。まず、(6)の用例には「あかつき」の詞書に「あさほらけ」と詠んでおり、(7)は「暁方」の詞書に「朝ほらけ」と詠んでおり、アカツキと朝ほらけの重なりは理解できる。(6)の用例では、霜が下りているのかと庭を見ると、月が照っているのだったというのだから、まだ辺りは暗い(月が明るい)時間帯のはずである<sup>6)</sup>。

さらに、(8)の用例の詞書では破線部も含めて「夜ひとよたふときとききあかして暁方」とあり、歌では「夜もすがら」「あさほらけ」「あかしの浦」の三つの語の関係は「夜もすがら」「あか」と「朝ほらけ」になっていることになる。夜もすがらと夜一夜はともに一晩じゅうの意味であり、その時間帯起きているのは「あかす」であった。夜もすがら、あるいは夜一夜をあかすと「暁方」あるいは、「朝ほらけ」と呼ばれる時間帯になっているのだった。その時間帯は(8)「朝トク」と言っても良かったのである。

#### 四一三

『陽成院親王二人歌合』の「あかつきのこひ」の題下には、二十首の歌があった。暁が、暁方も含めて九首。「あさほらけ」が二首で、「あさつゆ」が一首で、「けさ」が二首。「あさ」系統の語は合計五首。残りの六首のうち動詞「あく」で暁の題に答えているのは三首これらの歌は次節で改めて考える。

ここで残されたのは、33・38の二首の「しののめ」と37「おきてゆく」とである。まず、二首の「しののめ」から説明する。

33 しののめにあけゆくみちもまどはなんあかでわかるるひとのためにも

37 おきてゆくかたもしられずまどふかなみだもそでもめにさはりつつ

38 こひわぶるひとにあふよのしののめはわかるといかでみぬよしもがな

「しののめ」については別に説明をしなければならないだろう。ここでは、簡単に説明しておく。「しののめ」はうすら明るくなった時間帯である。それも33番歌には「あけゆく」の語が使用されている。「あけゆく」は暁の別表現である。午前三時を過ぎ、少し明るくなった頃である。33番と38番の歌は春か夏の歌と予想される。

37番の「おきてゆく」は男が女の所から去って行く時間が暁の時間帯であることを前提として表現していることは説明も要らないだろう。

#### 四一四

最後に動詞明くについて述べる。用例は

27 あけぬてふこゑもなみだももるともにうちいづるからにそでぞぬれける

31 あけぬとてあかざしきみをわかるればこころはゆかぬものにざりける

32 あけぬとていまはとおくるとこなかにまたあふべくもおもほえぬかな

の三首である。

これらの歌の統一的題は「あかつきのわかれ」であった。だから、各歌は暁の時間を詠んでいることは間違いない。三首の動詞明くが所属する文節を見てみよう。「あけぬてふ」が一首、「あけぬとて」が二首である。すべて、完了の助動詞又がついていることがわかる。暁の前に来る動詞明くは、日付変更を意味することは論ずるまでもないだろう。

これら三首の歌は暁を「明けぬ」で表現していたのである。

#### 五

『陽成院親王二人歌合』は「ねざめのこひ」と「あかつきのこひ」の題下にそれぞれ二十首が詠まれていた。

「ねざめのこひ」の題のもとでは、「よは(夜半)」を意識して歌が詠まれていた。「あかつきのこひ」では、「朝ほらけ」などが詠まれていた。「朝ほらけ」はアカツキの時間を意味することがここでもわかった。

それに、「ねざめ」と「あかつき」では時間の相違があった。「ねざめ」は午前三時まで、「夜半」であり、それ以降が「暁」であったのである。

#### 注

(1) 『夜の寢覚』(日本古典文学大系78 一九六四年 岩波書店)の阪倉篤義による解説、および補注一六九。

(2) 拙稿「アカツキとヨハ」(『総合文化研究所紀要第一六巻 一九九九年)ほか。

(3) 拙稿「夜をこめて」考」(『同志社女子大学学術研究年報2011年)。

- (4) 大久保道舟訳注『道元清規』(岩波文庫 青三一九一六 一九六六年 岩波書店)
- (5) 木船重昭『元良親王集注釈』(一九八四年 大学堂書店)
- (6) 拙稿「アサボラケ考」(『同志社女子大学学術研究年報63 二〇二二年』ほか)
- (7) 拙稿「アケハツ考」(『同志社女子大学学術研究年報64 二〇一三年』)